



Title	地域の伝統行事をテーマとした多文化交流授業
Author(s)	山田, 悦子; 古村, 由美子
Citation	メディア・コミュニケーション研究, 72, 165-177
Issue Date	2019-03-20
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/73279
Type	departmental bulletin paper
File Information	MC72-8_Yamada_Furumura.pdf



《研究ノート》

地域の伝統行事をテーマとした多文化交流授業

山田 悦子¹・古村由美子²

1. 交流授業考案の背景

本稿は、日本の東北地方のA大学と九州地方のB大学との間で行った、「地域の伝統行事をテーマとした多文化交流授業」についての実践報告である。E-forest社（福岡市）が開発した、ウェブサイト上の掲示版に類似した機能を持つ「Forum Site」を使用し、双方の大学の学生がそれぞれの地域の「祭り」をテーマとしたレポートを記述してサイト上にアップロードし、サイト上でコメントし合うことによって交流するという活動を行った。

このようにウェブサイト等を利用したオンラインでのコミュニケーションは、Computer Mediated Communication (CMC)やTelecollaborationと呼ばれ、1995年にはWikiが語学学習におけるリーディングやライティングスキルの上達のため使われ始めた (Li, 2012)。このコミュニケーションには同期型と非同期型の2つの種類があり、前者はスカイプや会議システムを使用したコミュニケーションとして知られており、スピーキング力向上 (Correa, 2015) や発音の向上 (Alastuey, 2010) のために使用されている。「Forum Site」は、後者の非同期型システムの一つでライティング力向上 (Kol & Schcolnik, 2008) やライティングを利用したディスカッションの練習 (Andresen, 2009) に使用されている。また、異文化交流のためにも使用され、交流相手の文化についてのステレオタイプを変える効果があったことが報告されている (Tavakoli, Hatami, J. & Thorngate, 2010)。

本研究における交流授業は非同期型の「Forum Site」を使用するものであり、様々な経緯から考案されたものである。本来この「Forum Site」は、外国や外国の文化との接触の少ないほぼモノリンガル、モノカルチャー環境にいる学習者同士を対象とし、サイトを使ってそれぞれの地域にしながら「異文化」との接触の機会を設けることにより、異文化間コミュニケーション力を高めるといった目的のもとに使用することを考えた。よって日本の大学の英語教育における日本人学生と、海外の大学（中国、台湾、ロシアなど）の英語教育における現地学生との英語を媒介語とした交流を、サイトにアップロードしたプレゼンテーションやプロジェクトにコメントをし合うという形の活動を、3年間ほど続けてきた。「異文化」との接触の少ない環境にいる者どうしの交流には成果が見られたものの (Furumura, 2013)、交流の活動デザインそのも

のに、「自国 VS 異国（他国）」という二項対立型の「文化」の把握を前提とすることに疑問が生じた。

EU圏で発達した「市民性教育（citizenship education）」の考え方に見られるように、一人の人間の持つアイデンティティや文化は、一つであるとは限らない。国単位の「ドイツ人」であり、同時に超国家的単位の「ヨーロッパ人」であること、それをさらに超えた「地球人」であることは可能である。複数の社会に所属し、複数の文化を同時に担うことは可能であり、文化の単位は常に国単位の「自国文化 VS 他国文化」とは限らない（バイラム, 2015）。日本でも、ショールズ（2013）、細川（2003）、馬淵（2010）など、「異文化」の特に「異」の部分に疑問を投じる理論が展開されてきた。

また比較的小規模な国の中にさえ地域文化の違いは存在し、個人のレベルでは家庭の文化、職場の文化、教育機関の文化等、多くの人は複数の違った文化の中で生活している。「文化」の実体は固定されたものではなく、実は曖昧でしかも時代と共に変化を続けるものである。多種多様な文化がいろいろな形式、度合いで流動的に入り混じり、ハイブリッドな性質を持つ空間は、既にKramsch (1993)が「自」、「他」の二項には収まらない「第三の場（Third Place/Third Space）」と命名し、認識されてきた。グローバル時代を反映した文化間交流は、このような複層的に複数の文化が重なり合う空間の中での交流になることが多い（Baker, 2011）。

このように考えると、従来実施してきた交流授業の形態には、あと一工夫が必要であると考えられた。よって日本国内で複数の文化が交わり、また参加者の背景にも多様性があるような空間で行う交流授業を実施することを企画することにした。その具体的な活動デザインについては、以下に述べる。

2. 交流授業のデザイン

上記の経緯を踏まえて、以下のような要素を交流授業に取り入れることにした。

- (1) 異文化間交流において一括りで捉えられがちな「日本文化」という国単位の文化の中にも、地域による特性や違いがあることに着目することにより、日本国内の多様性に注目する。
- (2) 日本人学生、様々な国からの留学生という多様な背景の参加者が交流を行う。
- (3) あまり抽象度の高くない内容を扱う。多くの参加者にとって英語は外国語であり、各学生の英語運用力にかなりの差がある。使用言語の制約がある中では、簡単なテーマ

を扱い、シンプルな表現で伝えることができるように活動をデザインすることが望ましい。

- (4) 通常の授業の枠組みを崩さずに、負担なく取り込める簡易な活動にする。急な人数バランスの変更にも、即座に対処できる柔軟性のある活動デザインにする（授業運営上の実効性や効率性を考慮する）。

インフォメーションギャップ（穴埋め）のように、自分の持つ情報と相手方の持つ未知の情報とを交換し合う活動が、相互のやりとりの必然性が創出されることから、適していると考えられた。A大学⁴では伝統文化体験の機会として地域の祭りに参加する予定が近かったこと、また地域による違いが把握しやすく、学生にとっても説明しやすいであろう対象を求めた末に「祭り」を題材とし、なるべく自分の「体験」を織り交ぜて情報発信をするような活動にすることとした。

A大学では32名（日本人学部生14名、留学生18名（アメリカ、中国、韓国、インドネシア、ベトナム、タイ、香港、ドイツ、オーストリア、イギリス、ニュージーランド））の学生が参加し、B大学では19名の日本人学部生が参加した。両大学とも学生をそれぞれ8グループに分け、グループごとにまず第一に以下の条件の英語によるグループレポートを、2014年5月第3週目より6月第1週目までの3週間ほどをかけて（週に1回、1コマ90分の授業時間）、まとめ上げることを課題とした。

交流授業に参加者する留学生の日本語力にかなりの差が予想されたことから、共通に使用する言語は英語とすることにした。A大学では、日本人の学部生と交換留学生とが共に学ぶ英語を媒介語とする授業で実施し、B大学では、日本人学部生の英語の授業で実施することにした。レポートやコメント等、英語で書いたものによって「Forum Site」上でコミュニケーションを行うという方法で合意した。テレビ会議システムやスカイプなどの通信手段を使った同時中継型の通信を介した活動を導入することも考えたが、授業実施日程の調整等の制約から難しく、選択肢からはずれた。B大学では、対象授業を日本人学生と留学生が共に学ぶ授業にすることは難しいという現状により、双方を全く同じ条件にして実践することは実現しなかった。

地域の祭りについてのレポートをグループで一つのファイル（マイクロソフトワードかパワーポイント）にまとめ上げ、各学生が350ワード以上を執筆し、だれがどの部分を担当したかを明確に記すようにした。グループ内で全体の構成、焦点を当てるテーマについてよく話し合ってから着手することにし、写真や動画へのリンクは効果的な方法で適宜使用することとした。相手にわかりやすい説明、記述をすること、自分独自の視点や分析、祭りに実際に参加した経験のある場合は、自分の経験から得たことを含めることという2つのガイドラインを提示し、これにグループ作業の協力度を加えて全部で3点の評価項目を設けた。前者2点のガイド

ラインに関しては、文献やインターネット上の情報の単なる丸写しなどを防ぐという意図もあった。学生の作成したグループレポートの一部分を、参考として付録1に掲載している。

A大学、B大学共に6月第一週目に、出来上がったグループレポートを「Forum Site」にアップロードした。サイトに一度アップロードした作品は、ログインすればメンバーはだれでも自由に閲覧できるが、一部のレポートに過度にコメントが集中するのを防ぐため、双方ともそれぞれ相手大学の一つのグループへの(たとえばA大学のグループ2は、B大学のグループ2へ)コメント、質問、質問への答えを責任をもって行うことを課し、それを満たした上で他グループの作品を自由に閲覧することは可能とした。「Forum Site」は、作品のアップロード、コメント記入などをすべて非匿名で行う点で、一般のフリーの掲示板とは異なり、各学生が自分の発信する情報に責任を持つという意味で、教育に適したツールであると言えるだろう。

2. データと考察

交流の意義について検証するために分析対象とした中心的なデータは、2週間に渡るコメントのやりとりによる交流を行った後に課題として課した振り返りの個人レポートである。個人レポートに関しては読み手は担当教員(筆者)ということで、日本語の使用も可とした。これは、学生が感じたこと、考えたことをより正確に把握する必要があったことからである。サイト上のコメント³に関しては、短いものが多く、長くても10文くらいまでが限度で、また一つの内容に関しての相互のやりとりの継続性、発展性についても、長くても4ターンくらいまでで終わるものが大半であった。これは、企画の段階であまり抽象度の高い内容は設定しておらず、単純な内容であっても相互のやりとりが生まれることを優先したことと関係しているであろう。ただ、中には行事の歴史についての質問に、詳細に調べた上で答えを書き込んでいるようなやりとりもあった。研究倫理上の手続きとしては、学生にはこのプロジェクトの開始前に、データ収集の目的、データの扱いにおいて匿名性、守秘義務が守られ、他の目的に使用されることはないこと、学生は趣旨に賛同できない場合はデータの収集、使用を拒否する権利があり、それによる不利益を被らないことを書面で説明し、学生の書いた文書を研究のために使うことについて同意書を交わした。

データに出現した内容ごとに「地域の行事の特性に関する気づき」、「自身の地域の伝統行事や知識に関する振り返り」、「交流の効用、方法に関する気づき」の3つにまとめ、以下に示す。

(1) 地域の行事の特性に関する気づき

文化にはエドワード・ホール(Hall, 1989)が定義した「Cultural Iceberg」のように大まかに2

つの種類が考えられる。目に見える形でのファッションや儀式などの氷山の水面上の表面的な部分、「big C」の「Culture」の部分に対して、精神文化など氷山の水面下にある深層部分、「small c」の「culture」の部分がある。学生にとって前者の水面上の表面的な部分、「Culture」のほうについては、コメントを書きやすかったようである。妥当性は別として、自分なりの分析や考察を含めて記述しているものが多かった。文化の表面的な部分からも、九州地方への外国文化の影響や、男性中心社会という伝統などをよくとらえている。

特に「Nagasaki Lantern Festival」のチームを見て思いましたが、ここが日本かと思えるほど中国の雰囲気にあふれていました。中国の龍を思わせるししまいや、ちょうちんや飾り物の赤の多い色彩などです。昔から貿易港として栄えてきた歴史がありありと感じられました。

(A大学、日本人学生)

私がB大学の学生のレポートから感じた九州の祭りと東北の祭りとの差異は、禪を吐いた男性やおみこしを担ぐ男性の姿が多かったことから、九州の祭りは男性主体の祭りが多いのかなと感じました。大きな魚や人形がパレードで通っていくのも東北の祭りとは異なる点だと感じました。九州は東北よりも暖かいからか、祭りも東北の祭りより熱く、力強さを感じました。宮城の祭りも盛り上がりますが、長崎の祭りよりも上品な感じがしました。そこに地域性の違いを感じました。

(A大学、日本人学生)

東北の祭りでは様々な人々が参加、協力していて、震災後の復興に向かって盛り上げようという姿勢が多少なりとも根底にあるのではないかな。

(A大学、日本人学生)

I think there are many differences between Tohoku and Kyushu, although both festivals in Japanese there seems to be a big Chinese influence running through the Nagasaki festivals by the art styles and patterns. Though each event celebrates different things, the goal is still the same in bringing people together in unity, I think.

(筆者訳) 東北と九州には多くの差異があると思う。ただ、どちらの祭りにも中国からの影響が強かったが、特に長崎の祭りには芸術面などにもその影響が大きいと感じる。どちらの祭りでも、目的は人々の結束をもたらすことだと感じる。

(A大学、留学生)

The difference is that people can participate in the dance easily in the festivals in Tohoku. The purpose of the festivals in Kyushu is to see them. An additional different point is that there are a lot of men, because the festivals in Kyushu are for men basically. On the other hand, everyone can participate in festivals in Miyagi, for example women, young people and old people.

(筆者訳) 東北と九州の祭りの違いは、東北では誰でも簡単に祭りに参加できることで、九州では見物することだと思う。九州の祭りは男性のためのもので、主に男性の参加者が多いが、東北の祭りでは女性や、若者、高齢者、誰でも参加できると感じた。

(B大学、日本人学生)

(2) 自身の地域の伝統行事や知識に関しての振り返り

この交流授業により、相手方の伝統行事へのコメントに限らず、振り返って自らの出身地の地域の行事に意識を寄せたり、関心を高めたりといった行動につながることを担当教員側も期待していたが、以下のようにその形跡が出現していたケースが見られる。文化を扱う学習においては、新しい知識を得るということ以上に、このような自己や自分の所属する社会の文化に関する内省行動がより重要な意味を持つ (バイラム、2015)。

A student from Taiwan commented “There is also dragon dance called “fire Dragon Dance” in Hong Kong. I learned from her comment that Taiwan has a similar culture event.

(筆者訳) (交流相手の) 台湾出身の学生は、「香港には『炎のドラゴンダンス』と呼ばれるものがある。」とコメントしていた。このコメントで、台湾には同じような行事があることがわかった。

(B大学、日本人学生)

I saw that most festivals which have been lasted a long time ago. But those festivals changed its system several times.

(筆者訳) 多くの祭りが長い期間続いているが、何度か形を変えているということがわかった。

(B大学、日本人学生)

In many presentations, it stood out to me that B university students seemed to be proud of their hometowns and local festivals. I could read students praising their hometowns and how proud they are of where they come from.

(筆者訳) ほとんどのプレゼンテーションを観て、B大学の学生は自分の故郷と地域の祭りを誇りに感じていると思う。彼らは自分の故郷を称え、自分の出身地を誇りにしていると感じる。

(A大学、留学生)

I didn't know about Hakata Yamakasa although it is the festival which is held in the prefecture I am from. I am ashamed of it. I should learn more about Japan.

(筆者訳) 自分の出身県、福岡県の博多山笠についてよく知らなかったことが恥ずかしい。自分はもっと日本のことを学ぶべきだと思う。

(B大学、日本人学生)

I've found that every area in Japan has their regional culture. But in common, these festivals are held to respect nature and the land of their hometown.

(筆者訳) 日本のどの地域にもその独特の文化があることがわかった。しかし、どの祭りにも自然とその地域に対する尊敬の念が込められていることが共通していると感じる。

(A大学、留学生)

(3) 交流の効用、方法に関する気づき

活動によって醸成された問題意識ややりとりの方法への向上策など、相互のやりとりの中からの発展性への意欲が見られた。相手方に理解してもらえたこと、またその逆にうまく伝えることができなかったもどかしさ、何をどのように伝えるのが効果的であるかについての見解など、実際に国際社会のコミュニケーションで起き得る様々な葛藤や模索の一部を体験していることがわかる。

The presentations I liked the most included a little bit of history or background knowledge and include personal comments about the students' experience. My overall feelings regarding this topic is that I'm not so interested in reading things I could google myself. I want to read real-life student opinions and personal experiences. I think the B university students used a lot of simple explanations and personal photos, which I liked.

(筆者訳) 自分が一番気に入ったプレゼンテーションは、歴史や背景について述べているものや、担当の学生が経験したことについて個人的なコメントを述べているものだった。グーグルで検索してわかるようなことには興味を感じなかった。本当に彼らが感じていることや、経験したことを知りたい。B大学の学生の多くはシンプルな説明や個人

的な写真を使っていて、私はそれらが気に入った。

(A大学、留学生)

I am impressed that some students focused on “Why” about our presentation. Japanese don’t care of the reason very much and receive something undoubtedly, I think. However, they asked “Why” or commented “Thank you for explaining the meaning of it”.

(筆者訳) 自分達のプレゼンテーションについて、先方の一部の学生が「何故？」と問いかけてくることが印象的だった。日本人の多くは理由についてあまり関心をもたず、他者の意見を疑わずに受け入れることが多いと思う。しかし、彼らは「何故？」と尋ね、(理由を説明した後は、)「説明してくれてありがとう」と言ってきた。

(B大学、日本人学生)

It was impressive to see a comment from an international student, I really want to go to Hakata before I go back to my country. This year, when the Hakata Dontaku will be held? This is because our presentation was understood. I am happy.

(筆者訳) 海外からの留学生からもらったコメントが印象的だった。それは、「母国に帰る前に博多に行きたい。今年の何日に博多どんたくは開催されるのですか？」というコメントだった。つまり、彼は私のプレゼンを理解してくれていたということだ。(理解してもらえたことが) とてもうれしい。

(B大学、日本人学生)

One person gave us a question about written in our paragraph. I was sad because I couldn’t explain clearly about our festival, and I felt it is difficult to tell what I want to say in English.

(筆者訳) 交流相手の人から、自分が書いた内容に質問が寄せられた。自分が説明した祭りについてきちんと説明できなかったことがとても悲しい。説明したいことを英語できちんと説明することは難しいと感じた。

(B大学、日本人学生)

…but through the conversation using computers, I would like to talk with them face to face.

(筆者訳) コンピューターを介して留学生と交流してきたけれども、彼らと顔を合わせて交流してみたい。

(B大学、日本人学生)

My presentation is read by foreign students in A University. It is first time I heard foreign student's ideas about Japanese culture.

(筆者訳) 自分の(英語での)プレゼンをA大学の(留学生の)学生さん達に読んでもらえた。日本の文化について海外からの(留学生の)学生さん達から意見を聞くのは初めてだった。

(B大学、日本人学生)

最後のコメントは、具体的な自分の感情には言及していないが、感激している様子を感じることができる。

3. 省察と展望

本交流授業を通じて、以下の4点のような新たな知見を得られたと考える。

(1) 書くことを中心とした活動の利点

結果論となるが、交流が話す活動ではなく、書く活動が中心であったことの利点が出出していた。日本人学生、留学生を問わず多くの参加者にとって英語は外国語であり、英語で話す活動の場合は、どうしても一部の例外的ケースを除いて、一般的に積極性や英語力の点で日本人学生と留学生との差が大きく、日本人学生が意味のあるコミュニケーションに参加できないまま終わるケースを多く見てきた。留学生は英語の運用力のある学生が多いことに加えて積極的に自分から話す傾向があり、日本人学生の英語の運用力との差が大きいと感じられることが多いが、書いたものに関しては、記入するコメントもそう長いものではないこともあり、両者間では大きな差として現れなかった。留学生は話すほうは流暢にこなしているが、実は書いたものには間違いが散見された。また、使用言語が母語であるか外国語であるかに関わらず、物事にじっくり取り組む傾向のある学生にとっては、瞬時の反応を要求される話すことを中心とした活動よりも、じっくり考えてから書くことを中心とした今回のような活動のほうが好ましく、適していたようである。

(2) 綿密な企画の必要性

企画は柔軟な幅を持たせたデザインであることが、非常に重要である。しかし同時に、それは綿密な計画に裏打ちされた企画である必要がある。前者に関しては、実施条件が当初予定していたものから多少はずれても、柔軟な形で実施できるような幅をもたせておくことも

重要であると学んだ。例えば履修者の数や留学生、日本人学生の人数バランスなどは、担当教員がコントロールできない場合も多く、学生が産出するものを主体とした活動であるので、中身の規格統一などは難しい。近年、複数の大学が交流する活動自体はそう珍しいものではないが、何について交流し、どのような参加者を対象とし、どのような手段を用いるかを前もって厳密に調整しておく必要がある。ランダムに学生同士をその空間に放っておくのではなく、綿密な計算をした上での企画が必要であり、担当教員にはファシリテーターとしての技量が、企画段階から問われることになるだろう。

また、当交流授業実施前には思いが及ばなかったが、学生の能動的な行動が主体となる活動の場合、教育上望ましくない行動への倫理面での対処法も予め考慮しておくべきであると気づかされた。一件、A大学の留学生から他グループの学生の作品に対する極端な批判が書き込まれ、書かれた学生たちが感情を抑えながら返答を書き込んでいるやりとりがあった。いわゆる「荒らし」で、インターネットの匿名のツールでは珍しいことではないが、「Forum Site」は非匿名で、最初に書き込んだ学生をすぐに特定することができた。もう一件、双方の大学の学生間のやりとりで話題が脱線し、フットボールチームの話になってしまっていた。教育的見地からの教員の介入も必要になることがあることを再認識した。

(3) 使用言語の制約

今回の参加者の条件としては、英語を使用言語とすること以外の選択肢はなかったと言える。交流授業で使用する言語レベルの調整は、内容やトピックを抽象的なものにしないことである程度可能になる。ただデータ収集に関しては、日本人学生については日本語で収集したほうが効果的であったであろう。また、フォローアップインタビューも、データをもっと詳細なものにするという点で実施したほうがよかったであろう。

(4) 交流の方法の検討

人々の移動がより簡単に行われるようになった現代においても、インターネットを利用した交流は、世界中の様々な地域との間で大きな手間やコストを伴わずに実行することができるという点で、今後も盛んに教育現場に取り入れられていくであろう。

インターネット上で交流できるウェブツールの技術的な発達は目覚ましく、当交流授業実施時には数少なく、高価であったのが、ここ数年で多く出現し、現在ではその多くはフリーソフトで一般的に珍しいものではなくなった。日常的にスカイプやラインで外国とのやりとりを、個人でも簡単に実現できる環境にある今、どのようなツールを使用してより効果的に、「個人では難しい、教育現場であるからこそ可能になる交流」を実現できるのか、どのような方法によってより「学びの多い」教育につなげることができるのか、さらなる熟考が必要であろう。

今回の試みでは以上のような知見が得られたと感じている。実験的な段階であったこともあり、交流の方法や内容については改善すべき点多々あると認識している。それらを今後の課題として取り組んでいきたいと考えている。

謝辞

データ収集への協力を得た両大学の交流授業参加者に謝意を表する。

本稿は、JSPS科学研究費補助金「海外に興味を持たせ国際化推進を支援する教育方法の提案（代表：古村由美子）課題番号24617009」の助成の成果である。

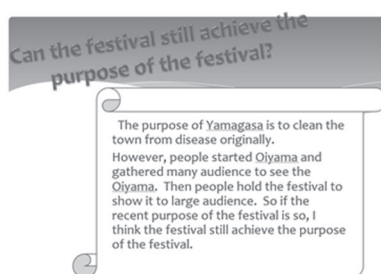
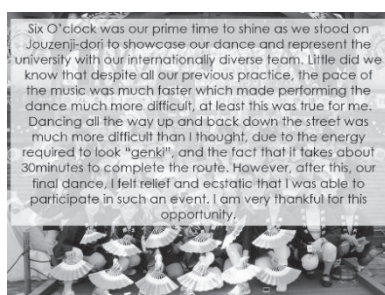
本文中でA大学としている東北大学の仙台青葉祭りへの参加は、この交流授業実施直前の2014年5月に初めて実現した。宮城県仙台国際交流協会の助言および助成、また学生の「すすめ踊り東北大学国際チーム」結成に際して、公益財団法人中島記念国際交流財団、独立行政法人日本学生支援機構(JASSO)「平成26年度留学生地域交流事業」の採択事業としての助成金に深く感謝申し上げる。

参考文献

- ショールズ、ジョゼフ(2013) 鳥飼玖美子(監)、長沼美香子(訳)(2013)『深層文化—異文化理解の真の課題とは何か』大修館書店(原著: Shaules, J. (2007). *Deep Culture, the Hidden Challenges of Global Living*. Clevedon: Multilingual Matters.)
- バイラム、マイケル(2015) 細川英雄(監)、山田悦子、古村由美子(訳)『相互文化的能力を育む外国語教育—グローバル時代の市民性形成をめざして』大修館書店(原著: Byram, M. (2008). *From Foreign Language Education to Education for Intercultural Citizenship*. Clevedon: Multilingual Matters.)
- 細川英雄(2003)「『個の文化』再論：日本語教育における言語文化教育の意味と課題」『21世紀の「日本事情」』5、36-51
- 馬淵仁(2010)『クリティック多文化、異文化—文化の捉え方を超克する』東信堂
- Alastuey, M.C.B. (2010). Synchronous-voice computer-mediated communication: Effects on pronunciation. *CALICO Journal*, 28(1), 1-20.
- Andresen, M. A. (2009). Asynchronous discussion forums: success factors, outcomes, assessments, and limitations. *Educational Technology & Society*, 12 (1), 249-257.
- Baker, W. (2011). Intercultural awareness: modelling an understanding of cultures in intercultural communication through English as a lingua franca. *Language and Intercultural Communication*, 11(3), 197-214.
- Correa, Y.R. (2015). Skype™ conference calls: A way to promote speaking skills in the teaching and learning of English. *PROFILE Issues in Teachers' Professional Development*, 17(1), 143-156.
- Furumura, Y. (2013). Remedying negative stereotypes by identifying the origins of stereotypes: From semantic or affective learning? In S. Houghton, Y. Furumura, M. Lebedko, & L. Song (eds), *Developing Critical Cultural Awareness: Managing stereotypes in intercultural (language) education* (pp.29-47).

- Newcastle: Cambridge Scholars Publishing.
- Hall, E.(1989). *Beyond Culture*. New York: Anchor Books.
- Li, M. (2012). Use of wikis in second/foreign language classes: A literature review. *CALL-EJ* 13(1): 17-35.
- Kol, S. & Schcolnik, M. (2008). Asynchronous forums in EAP: Assessment issues. *Language Learning & Technology*,12(2), 49-70.
- Kramsch, C.(1993). *Context and Culture in Language Teaching*. Oxford : Oxford University Press.
- Tavakoli, M, Hatami, J, & Thorngate, W. (2010). Changing stereotypes in Iran and Canada using computer mediated communication. *Journal of Intercultural Communication*, 23.

付録1 学生の作成したグループレポートの例



-
- ¹ 当交流授業実施時、東北大学高度教養教育学生支援機構グローバルラーニングセンター在籍
- ² 長崎大学言語教育研究センター（当交流授業実施時、同大学経済学部在籍）
- ³ サイト上のコメントには個人名が多く含まれており、実際のサイト上の画面については掲載を割愛した。

《SUMMARY》

A Report of Exchange Sessions on Traditional Regional Events

YAMADA, Etsuko FURUMURA Yumiko

This is a report on exchange sessions between two universities in Japan: one is located in Miyagi, in Tohoku region and the other one in Nagasaki, in Kyushu region. Using a website tool, student participants exchanged information on the traditional events of their own regional areas in English. The findings of this practice can be summarized as the following four points: the advantage of using writing activities, the need for the detailed and thorough planning of the sessions, the significance of controlling the language used, and the effective use of internet tools. Internet technology has been advancing remarkably in recent years, but differentiating educational and meaningful interactive activities from purely entertaining ones should be considered.